

## 第3回とよおか教育プラン策定委員会 会議録（要旨）

### ○ 日時・場所

2024年9月3日（火） 13：45～15：45

本庁舎2階 大会議室

### ○ 出席者等

#### 1 出席委員 15名

安藤福光委員長、能登琢也委員、飯塚智士委員、森山健二委員、内海忠裕委員、田淵智子委員、尾畑いつ子委員、西垣浩文委員、吉谷稔子委員、北村美名委員、久保陽子委員、小松和巳委員、西田 清委員、加藤みずほ委員、平田知之委員

#### 2 欠席委員 3名

植田博成委員、山本邦彦委員、田畑裕子委員

#### 3 事務局・関係課 15名

嶋教育長

正木教育次長

学校教育課 寺坂課長、服部教育研修センター所長

幼児育成課 向原課長、河本参事、三輪参事

社会教育課 旭課長、奥館長

こども支援課 吉本課長、鳥居こども支援センター所長

教育総務課 木之瀬課長、栗垣参事、足立係長、森垣

### ○ 会議内容（進行：委員長）

#### 1 開 会

事務局より、欠席者の確認、会議の公開（傍聴の許可、会議資料・会議録のホームページ公開）、会議の進め方について説明。

#### 2 教育長あいさつ

昨日から2学期が始まった。教育委員会は、先週の金曜日に9月議会が開会し、来週から一般質問が始まる。今日の午前中に通告があったが、このような質問があった。「豊岡の学力はどうですか」というもの。学力についてよく話をしているが、もう一度、皆さまが学力をどう捉えているか話していきたい。「知識・技能」とは、私達の子どもの頃から学力の中心として語られてきた。たくさんの知識を持っているか、たくさんの技能を習得しているか。それも大切だが、今文部科学省が言っているように、学力には三要素ある。

1つ目は今申し上げた知識・技能。2つ目は知識や技能をどのように使うかという思考力。どう思考し判断するかという力、思考力・表現力・判断力である。3つ目はどういった資質を育てるか。主体性・多様性・協働性である。主体的に学んでいるか。多様に学んでいるか。協働して学んでいるか。そうするためには、従来のようにチョーク1本で、ひたすら先生が

説明し、何とか分かりやすく新しい知識を子ども達に授けようとする方法ではダメである。今日も出てくるが主体的で、対話的で、深い学びという手法が出てきた。前回の第2回委員会にて、私は意見があまり出なかったことを反省した。これは、一方的に事務局が説明し、分かったような、分からないような言葉をたくさん使い、そして時間をあまり設けなかった典型的な昭和の授業のような委員会をしたため、反省をし、先ほど事務局が言ったように、今日は時間を区切り、それぞれ分からないことや疑問点を持ったことをグループで話し合いができるよう、対話的な学びの場にしたい。今日の会議が主体的で、対話的で、深い委員会になるようお願いしたい。

### 3 協議事項

#### (1) 第5次とよおか教育プラン 第1部について

##### ア 策定の趣旨について資料1～2ページを説明

(説明：学校教育課)

##### 【委員長】

今から10分ほど時間を取るので、今説明のあった箇所について、例えば「言葉が分かりづらい」など、グループごとに共有していただきたい。前回の会議で、「業界用語が多すぎる」というような意見がある。これは多くの人に読んでいただくものであるため、特に表現や言葉について、委員の皆さんそれぞれの立場から見たときに、これはどう映るのか、グループの中で意見を出し合っていたいただきたい。10分経過したら、各グループでどのような意見が出たか全体に共有し、次に進めたい。

～グループごとに意見交換～

##### 【委員長】

どのような意見が出たか、各グループから簡単に発表いただきたい。

##### 【副委員長】

策定の趣旨を語り合うため、大きなテーマだった。実際の現場の実態と提案する中身がリンクしづらい。この会自体が、もう少し現場の声を言う会と思い参加された方もいる。教育委員会がまとめたものを確認する流れであり、思っていたイメージと違うと声があった。

ここに集まったのは教育関係者であるため、教育用語については難しいものはないように思う。注釈も加えられている。一般市民が見ると難しいと感じる言葉はあるだろうという意見も出ていた。その中でより現場の声をすくい上げ、このプランではどうするかという流れやつながりが、より密接になればよいという意見があった。

##### 【委員】

一般の方が読まれた時に、非認知能力にしても、聞き慣れない言葉がある。注釈や説明書

きがあり、照らし合わせることで理解できるという意見があった。2ページの図にあるように「自分にはよいところがあると思う」とあるが、子どもたちはどこがどうよいと答えていたのか、どのような言葉を使ったのか気になった。嬉しいと思うと総合的な感じになっているが、何を嬉しいと感じたかが見えない。紙面が限られる中で全てを表現することは難しいと思うという声が上がっていた。

今後に向けた課題では、保護者や地域に対して、非認知能力の向上について説明することがとても難しいとの意見があった。園でもさまざまな遊びを通し、非認知能力が育っていると繰り返し伝え理解していただくという点が重要な課題と認識している。

#### 【委員】

教育用語をあまり崩すわけにはいかないが、注釈もあるため気にする必要はないのではという声があった。

アンケートについて、児童生徒の主観になり、正確性はどうかと疑問を感じる。先生側もどのような意見を持っているのか知ることができるといい。

保護者や地域に対する周知徹底の部分では、周知徹底は大切なことだが、高齢者を含む方々が実感として本当の理解を得られるのかと声があった。

課題では、非認知能力の向上事業の検証結果の学校間格差とは何か。資料を見てもわからないという意見があった。

#### 【委員】

3点疑問があった。1点目は、1ページ目の真ん中あたり「2017年度の全国学力・学習状況調査」において、「家庭の社会経済的背景（SES）の指数が低くても高い学力を示した子どもは、非認知能力向上に関わるような取組を学校や家庭が行っていた」とあるが「非認知能力向上に関わるような取組」とはどのような取り組みなのか。具体例があると分かりやすいと声があった。

2点目は、2ページ目の5～6行目「夢や目標など自分や社会の現在と未来を創造するために必要な力である非認知能力の向上について」の部分で、夢・目標は自分のことであり、社会の現在と未来とあるが、ここに社会という言葉は必要なのか、という意見が挙がった。自分のことか社会のことか分かりづらいとの意見があった。

3点目は、「演劇ワークショップと教科教育を非認知能力向上の視点で一体的に取り組むことに課題が見られた」の部分にて、「一体的に取り組むことに課題」とは、一体的に取り組むことが難しいか、一体的に取り組んだことで課題が生じたのかが分かりにくいとの意見があった。

#### 【委員】

保護者の立場と就学前施設の立場で意見を出し合った。そもそも、非認知能力とは何かと疑問が挙がり、一般市民であれば初めて聞かれる言葉ではないか。やり抜く力、自制心、協

働性の3つについて、やり抜く力は分かるが、自制心、協働性とは何かと疑問が出た。教育関係者である私たちは分かるが、具体的にこのような力と書かれてないと、分からない部分が多いのではとの意見が出た。また、学校が全てではなく、家庭でもできることがあるのではないかと気づきもあった。

#### 【委員】

言葉について2つ意見が出た。非認知能力という言葉は、最近よく聞く言葉であり、なんとなく分かる、聞き慣れているという意見があった。演劇ワークショップも、言葉は聞いたことがあり、学校からの手紙でこのような様子でした、と読んだことはある。しかし、実際に見たことはない。何の目的で、子どもがどのような様子で体験しているかを見てもらえたら伝わるのでは、との意見が出た。見たことはないけれど、想像すること・人と関わる活動をする事自体に意味があり、孤立しがちな子どもたち同士を繋ぐ意味のある事だとの意見が出る。

「つながる」という言葉がキーワードであり、10年前の保護者と今の保護者は全く違う、という意見があった。子育て中のお母さんたちに、子育てサークルの活動について案内すると参加してもらえたが、最近は「結構です」と、親御さん自身が人との関わりを自分の意思で断つケースが目立つ。その保護者の様子を子どもたちは見ているため、人とつながることの意味は大切にしないといけないのでは、との意見がでた。一方、子育てに困っていてどうしたらいいか分からない保護者もいるとの意見もある。

#### 【委員長】

非常に有意義な意見が出ていた。事務局の方から回答があればお願いしたい。

#### [事務局]

頂いたご意見は、持ち帰って検討したい。非認知能力の向上についての説明をどれだけ具体的にできているのかという課題もある。2ページ目の「夢や目標など自分や社会の現在と未来を創造するために必要な力である非認知能力の向上について」での「社会」は必要かというところについて、教育自体は学校だけではなく社会で、という一面があるため、この言葉を入れている。

2ページの下から3行目にて「演劇ワークショップと教科教育を非認知能力向上の視点で一体的に取り組むことに課題が見られた」で、豊岡市では演劇ワークショップを核として行っているが、それ以外にも非認知能力の向上の視点を取り入れた授業や学校行事を、バランスよく実施していくという意味合いになる。

#### 【委員長】

非認知的能力と教科教育の一体的に取り組む課題とは、学校現場としてはどのようにすればよいか難しいところがある、ということだろうか。今後、教育委員会として好事例を取り挙げ、学校の先生方に分かりやすく説明する研修の機会が必要なのでは。

用語の難しさは悩ましいところである。本文を易しく書きすぎるのも難しい。概要版の作成は考えないといけない。非認知能力や自制心、協働性などを、やり抜く力のような日常用語レベルでの概要を作成する必要があるのではと考える。

## イ 本市教育の成果と課題について資料3～8ページを説明

(説明：学校教育課)

～グループごとに意見交換～

### 【委員長】

事務局からご説明頂いた教育成果と課題について10分程度グループで話し合いをしていただいて、不明点や分かりにくい点などを、意見を出していただきたい。

### 【委員】

3点ある。1点目は3ページにグラフが2つある。「先生があなたの良いところを認めてくれる」というところで、小学校は91.9%から90.2%と段々下がっているが、文章表記では強い信頼関係がある、と表記がある。また話し合いによって考えが深まる、広げられるとあるが87.0%から87.1%と横ばいで伸びている訳では無いため、課題にしても良いのではないかとの意見があった。

2点目は、不登校がとても増えていて驚いた、という感想があった。5ページに小学校と中学校のグラフがあるが、同じ目盛に1つのグラフで表した方が、中学校の方が多いことが分かるのではないかとの意見が出ていた。合わせて6ページのこども支援センターの相談件数が増えていない。先ほど服部所長から「豊岡市不登校対策アクションプラン」の改訂によって、学校の対応が進んだのではないかと見解があったが、どこかにそれを記載してはとの意見が出た。

3点目、7ページの特別支援の通級指導を希望する児童は増えているが、こども支援センターへの相談件数は増えていないことについて、どこか記載がしてあるのかという意見が出た。

### 【委員】

3ページの「主体的・対話的で深い学び」の解説が、とても分かりやすい。

不登校の数がとても増えているが、不登校の連携支援にかかる数は減っているのはなぜか。課題として5ページに書いてあるように、寄り添った支援がまだまだ必要だという意味合いで読み取ったが、その解釈で合っているだろうか。

特別な支援を必要とする子どもたちが増加していること。その子どもたちが増えたことで相談件数が増えるはずだが、減っていることに対してどうしてかと疑問があった。理由やなぜこうなっているのか原因が知りたいとの意見が出た。

#### 【委員】

学力の向上について、以前出された意見が良く反映され分かりやすい。

不登校の項目にて、5ページのグラフを見て、6ページの人数を見ても増えている状態が分かるが、全体として児童生徒数が減っていく中で不登校が増えているため、児童生徒数が減少していると付け加えるとより分かりやすいとの意見が挙げられた。

#### 【委員】

特にこの3つの中で、個々に関する問題は無いと思っている。感想になるが、主体的・対話的で深い学びの授業スタイルに変わることが、基本的に学力や不登校、特別な支援を必要とする子ども達への対応に全てつながると考えられる。その元にあるものは、教員の業務の精査をしていくことではないかと考える。学校だけに任せるのではなく、市が主導性を持ち、「こういったことはやめよう」と発信があれば、働き方改革は進んでいくのではないかと考えられる。

もう1点として、特別な支援を必要とする子どもたちにスポットが当たっているが、「支援のいない子はいない」という表記があると良いのではないかと意見がある。

#### 【委員】

不登校のことで話が出たが、教育プランは豊岡市の教育の方向性を示すものである。学力のように数値で表せるものはこの図を見てすぐに分かるが、不登校の子の説明書きに「未然防止、早期発見、早期対応」とさらりと流れの中で記載がある中で、未然防止とは具体的にどのような事か。早期対応は「休みだした、もしかしたら不登校につながるかも」と分かるが、未然防止、早期発見は一般としてはどのようなことか。

そして、寄り添った支援も漠然とイメージはできるが、もう少し説明書きがあれば、そうすることで読む人がより気を付けて関わろうと思うのでは。教師だけでなく、一般の方も含め、周りも気にしてくれる所につながると考えられる。支援の部分も、利用者は数値で表しやすいが、文章の奥にあるどのような努力をして未然防止してきたか。「取り組んでいく」ではなく、「取り組んだ」とある部分で、もう少し伝えるものがあれば、との意見が出た。

#### 【副委員長】

不登校児童生徒数の増加について、5ページの1行目で、第4次計画期間におけるコロナ禍の影響について記載されている。ただ、コロナが不登校増加の直接的な要因だと数値から断言することは難しい。しかし、定性評価においては、不登校増加の原因としてコロナの記載は外せないという意見が挙げられた。

もう1つは、これが学力につながるか分からないが、コロナ禍で制限された部分がある。例えばグループ活動や、直接話をする事、マスクをして表情を見ることも制限された。これらのことが、コロナが過ぎたからこそ、今後5年10年の子どもたちの成長に大きく関わっているのではないかと。1つの例として、非認知能力を向上する演劇ワークショップの話題が出てい

た。例えば子どもたちに「餅つきをみんなでしよう」と課題を出したとき、餅つきがイメージできる子とできない子が、よりはっきりと出てきているのではないか。生活経験が作用し、今後の学習活動に何らかの影響を与える懸念があるのではとの意見が出た。

最後に、4ページの資料、図表1について、2021年度は22.0%、と2022年度は19.2%とがあるが、数値が逆ではないかと指摘があった。

**【委員長】**

事務局から何かあればお願いしたい。

**[事務局]**

今頂いた意見で、加筆してより分かりやすく整理し、まとめていければと思う。

**【委員長】**

今出た意見は非常に重要なところがある。事前に資料を頂き、色々意見を挙げたが、説明をきちんとしないといけない部分がある。読んでいる人がどう理解しても良い部分はど理解しても良いが、そうでない部分は、きちんと事務局でやっていることを含めて書いた方がいいと思う。それは先ほど意見で挙がっていた学校への全ての依存からの脱却と、具体的なことが分かれば地域の方も保護者もやりようがあり、バランスを考えるとより丁寧な記述が必要になると思う。資料10ページに働き方改革の推進とあり、教育振興基本計画の今後の方向性となっている。学校の現状が読み手に分かるように書き、全て学校にお任せしようという意識をなるべく文章で具体的に書くことで認識してもらうことが必要。今後丁寧な記述を心掛けてもらいたい。またグラフの数値について、後で確認してほしい。

**ウ 社会情勢・教育環境の変化について資料9～11ページを説明**

(説明：学校教育課)

～グループごとに意見交換～

**【委員長】**

どのような意見が出たか、各グループから簡単に発表いただきたい。

**【副委員長】**

2点話題がでた。1点目は、新型コロナウイルス感染症の拡大で、「学校園が人と安全・安心につながるができる居場所・セーフティネットとして、身体的・精神的な健康を保障するという役割を担っていることが再認識された」とあるが、認識できたことは良いこととして捉えたい。そこからどのような対策が講じられるのかを考えることが大事との意見が出た。それに対して、学齢や地域によって差があるため、その実情に応じた取組が必要になる

との意見が出た。

2点目は、学校における働き方改革のさらなる推進の部分で、推進することにより、教員の自己効力感や、教員自身のウェルビーイングが守られ、それが子どもの自己効力感の向上や、子どものウェルビーイング、また子どもの命を守ることにつながるため、欠かすことができないのでは、との意見が出た。

#### 【委員】

コロナを介することで、色々なことが浮き彫りになったと表記されているとおり、学校園で当たり前に行われてきた行事を見直す良い機会になった。しかし、私が認識している以上に子ども達への影響は大きかったと保護者から聞いた。小学校に入学し、給食がスタートした時にすでに黙食であった子どもたちがいる。私たちが生まれ育った時には、楽しく給食を食べる経験をしているため、3年間黙食と言われても、話してよいと言われると話することができる。しかし、黙食しか経験していない子どもから、「明日から話してよいと言われても、何を話したらいいかわからない」と聞かれたそうだ。私が考えていた以上に、コロナで制限されたことは子どもたちへの影響が大きい。そこを周りの大人が理解し関わらないとスタートに大きな壁ができると思う。『『当たり前』の取組を見直す』について、学校側は例えば運動会などの実施方法だと理解できるが、色々な人が読んで理解してもらうために、『『当たり前』の取組』をもっと具体的にしてもよいのではと感じた。

ジェンダーの部分はとても難しい表現で分かりにくい、分かりやすい表現にならないかと考えた。

#### 【委員】

コロナの影響で悪い面もたくさんあったが、良い面もあった。例えば当たり前を見直すような、学校の業務全体を見直す良い機会になったとの意見があった。また、学校における働き方改革について、さらなる推進をしっかりと進めて欲しいという意見が挙がった。

#### 【委員】

新型コロナウイルス感染症の拡大の部分で、2020年に緊急事態宣言があり、2023年5月に5類に位置付けられたと日付を入れることで、記録として後から見た時に役に立つのではとの意見があった。

10ページにて社会的包摂という言葉は最近よく使われるが、いざ説明するとなると難しいため、これも注釈があればありがたい。

学校における働き方改革のさらなる推進の部分では、2023年度の教職員の月平均超過勤務時間を2018年度と比較すると、小学校で約10時間、中学校で約8時間30分と減少している。これは2023年に「豊岡市『学校における働き方改革』推進方針」が策定されたことを少しでもアピールしてもいいとの意見がある。また、働き方改革のところ、中学校の一番の課題である部活動の地域移行・地域連携について全く触れられていないため、具体的なことは決まっていないが記述がある方がよいとの意見があった。

**【委員】**

新型コロナウイルス感染症の拡大の部分で、現場としては当たり前の行事を見直す機会になった。それを機に、子ども主体で保育・教育をしなければいけないと再確認できたことは身をもって感じた。この点は、私の立場で気づいたことである。

もう1点は、ジェンダーギャップである。ジェンダーギャップという言葉は時代の流れでよく使われるようになり、最近テレビでもよく聞く。この教育プランを見て、具体的に豊岡市でこういう取り組みがあったのだと初めて知る人も多いのではないか。また、豊岡市がどのような戦略で取組を進めているのかを具体的に書いても良いのではとの意見があった。

**【委員】**

新型コロナウイルス感染症の拡大部分にて、学校が役割を改めてとあるが、地域コミュニティが子どもの居場所に繋がり、学びの場であるという視点も大切であるとの意見が出た。学校は地域と共に歩んでいくのだという、豊岡市の心構えや視点も必要だとの意見が出た。

学校における働き方改革のさらなる推進については、コミュニティ・スクールを利用して地域でできることを役割分担しながら、先生方の負担を減らしていくという意味合いを強調してほしいという意見が出た。

**【委員長】**

事務局から何かあればお願いしたい。

**[事務局]**

今いただいたご意見を精査していきたい。

**【委員長】**

取組についてアピールとして書いた方が良いとの意見があるが、私ももう少し詳しく書いた方が良いと感じた。これは、ここだけに限らず全体に通じることである。ジェンダーの社会的包摂の用語解説もお願いしたい。

9ページの人口減少社会の進行について、小学生のみ書いてあるが、中学生も入れたらどうか。「小学校の児童数を見ると」とあるが、豊岡市は小中学校があるため、合わせて書いてもいいのでは。もしくは、就学前の子どもたち、市が対象にしている子どもたちを書いた方がより分かりやすいと思う。

**エ 教育の方向性について資料12ページを説明**

(説明：学校教育課)

～グループごとに意見交換～

**【委員長】**

どのような意見が出たか、各グループから簡単に発表いただきたい。

**【委員】**

3点ある。4行目の具体例で「学力、不登校、いじめ、貧困など」とあるが、「いじめ」を取り外し、「孤立」や「孤独」などのキーワードを使う方が、後につながるのでは、との意見がある。

2つ目は、幸福感についてである。書いてある通り誰かの役に立つ等の満たされた気持ちは、どのような立場の人も味わえるのではないかという意見が出た。

3つ目は、3行目に「自己の人生を拓き、生き抜いていく力」とあるが、その後にコミュニケーション能力を加えてはどうかとの意見が出た。

**【委員】**

1点ある。4段落目、「多様な人々が共に暮らす社会において…」の文章で、「あらゆる他者を価値ある存在として尊重する」とあるが、「価値ある存在」という表記に違和感を覚える。

「価値がある」と言うからには「価値がない」と反対の言葉もあり、価値がない人間はいないことを知らせていかなければいけないと思う。価値がない人はいない、ということ的前提にし、価値がある人と表現を入れるのであれば良いが、例えば「あらゆる他者を人として尊重する」という言い方がいいのではないかと思った。

**【委員】**

特になし。

**【委員】**

5段落目、「不易の教育」という言葉は一般化しているのか。「不易の教育」という言葉がなくても意味が通じるのではないか。

また、4段落目、「学校・家庭・地域が豊岡市一丸となって」とあるが、ここの「豊岡市」は必要なのかという意見が出た。当然一丸となり行くと意味は伝わるが、表現としてはどうなのか。また、家庭と地域が連携・協働することは重要だが、一体となり行うことが分かるような一文を続けると良いのではないか、との意見が出た。

**【委員】**

グループとしては特になし。子どもたちが在りたい自分や、在りたい未来と、子どもが感じる部分で、在りたい自分よりなりたい自分、在りたい未来であれば社会のことを指しているのかとも思える。まず子どもがなりたい自分と自分の未来を描けるかどうか、どちらを指すのかと考えた。

**【副委員長】**

1つ目は幸福感という言葉について、とても幅が広く様々な捉え方ができる。文章の中でもこのような意味をもつと限定しているが、受け取り方によればそれぞれ自分の方向に向かって歩いていけば良いという意味が含まれていると感じた。その中で自分の居場所があることが、幸福感の土台となることや、また他の委員からウェルビーイングの4要素という話を伺った。その中に「ありのまま」という要素がある。ここが担保されないと、次の「これやってみよう」、「次はこんな風にやりたい」というようにつながらない部分もあるのではないかと話が出た。

**【委員長】**

事務局から何かあればお願いしたい。

**[事務局]**

在りたい自分のところで、第3次豊岡市教育振興基本計画では、「在りたい自分に向けて実現する」と掲げていた。在りたい自分とは、野球選手になりたい、こんなリーダーになりたいなどの外面的な目標として捉えている。今回、在りたい自分を入れた理由としては、内面的な状態を大事にするためである。他者に評価されるのではなく、自分で評価し、これでいいのだと勉強が苦手でも自分の得意なところを評価していける子どもたちに育てるため、在りたい自分や在りたい未来・社会と考えこの言葉を使っている。

**【委員長】**

幸福感についていくつか出ているが、今回国の基本計画でウェルビーイングが使われており、他市の教育振興基本計画で、ウェルビーイングの説明を手厚くしている自治体もある。ウェルビーイングについて、注釈を入れるか、どこかに取り出しで書いた方がいいと思うため事務局にお願いしたい。

**オ 計画の期間と性格及び運用について資料13ページを説明**

(説明：学校教育課)

**<質疑応答>**

**【委員長】**

こちらについては、グループでの話し合いは行わない。ご意見やご質問があれば、お願いしたい。また、全体を振り返り何かあるか。

**【委員】**

なし。

**4 その他**

・第4回策定委員会

10月15日（火）14：00～【市役所7階 第3委員会室】

5 閉 会（副委員長）

貴重なご意見をたくさん頂いた。

豊岡市では、早い段階から非認知能力に目をつけ、取り組みを進めてきた。私は豊岡市の特徴は2つあると考えている。1つ目は、非認知能力である。これは数値で表すのが難しいため、認知能力とセットにして、一体化し高めていこうという取り組みをしてきた。だからこそ教科教育や非認知能力向上の視点ということが浮き彫りになったのではないか。

2つ目は個人とするのではなく、園も小中学校も、市を挙げて皆で組織的に取り組むことが豊岡の特徴であると考えている。ここに幸福感の視点を加え、新たなプランを作成しようと考えている。より良いプランになればと願っている。

今回、グループで協議する新たな手法を取り入れ、より多くの意見を聞かせていただいた。残り2回予定されているが、皆様の知恵をお借りしたい。